様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 21 日現在

機関番号：12603
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520422
研究課題名（和文）フランス語の他動性と直接目的属詞文，属詞動詞文，非動詞文の統辞・語彙的研究
研究課題名（英文）A Syntactical and Lexical Research on Transitivity and Objective Complement, Subjective Complement and Non Verbal Sentences in French
研究代表者
敦賀　陽一郎（TSURUGA　YOICHIRO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：30155444

研究成果の概要（和文）：フランス語構文体系では圧倒する他動詞構文に対して être，等の属詞構文が重要な役割を担う。直接目的属詞については位格とも範列的に関係していること，間接目的属詞の存在も考慮すべきこと，属詞動詞構文については不定詞も属詞を担うこと，また非人称構文中で que 節も属詞を担いうることは注目すべきである。非動詞文分析に関しては動詞文から切り離して外心構造に基盤を置かねばならない。

研究成果の概要（英文）：In the French constructions' system, transitive constructions are overwhelmingly important but complement constructions by *être*, etc. play important parts. The direct object's complement is paradigmatically linked with the locative, and it is necessary to take into account the indirect object's complement also. As to complement verbs' constructions, it is remarkable that infinitives assume the complement and that in impersonal constructions, *que* propositions can also have a complement function. And the analysis of non verbal sentences must be based on the notion of exocentric structure, independently from verbal sentences' constructions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：他動性，直接目的属詞，属詞動詞，属詞，非動詞文

１．研究開始当初の背景

フランス語構文体系の分析を機能統辞論（A. Martinet: 文構成の統辞機能の体系化; *Grammaire fonctionnelle du français*, 1979）と語彙・文法モデル（M. Gross: 構文－語彙関係の具体的解明; *Méthodes en syntaxe*, 1975）に基づいて進めて来ていて，理論的には L. Hjelmslev, L. Tesnière, Ch. Fillmore, B. Levin, 等の格文法や構文論に負うところも大きい。成果は特にこれまでの科学研究費による次の調査に結実している。(1) 1994-1996 年度『フランス語における構文・語彙体系の統辞・語彙的基礎研究』は基本文型（直接目的，間接目的，代名動詞，受動，自動詞，非 être 属詞動詞，être，非人称，主辞なし動詞，非動詞）の頻度調査をしたもの。(2) 2001-2003 年度『フランス語における他動性と間接目的の統辞・語彙的基礎研究』は直接目的と間接目的

に焦点を絞る。間接目的は特に前置詞 de，à 付きのものが圧倒している。(3) 2006-2009 年度『フランス語の他動性と受動・自動詞・代名動詞・非人称構文の統辞・語彙的基礎研究』は態（能動，受動，中動（代名態）），自動詞，非人称に焦点を絞り，受動・中動・非人称の対等な重要性を分析。

今回の直接目的属詞文，属詞文，非動詞文は残った重要構文であり，他動性 – 属詞性，動詞 – 非動詞が柱となる。

２．研究の目的

(1) 構文体系中での他動詞構文と属詞構文との本質的関係を観察するべく，構文型全般のデータベースの更なる充実を目指す。これは次の 10 種の文型の分析である。① 直接他動詞文，② 間接他動詞文，③ 代名動詞文，④ 受動文，⑤ 自動詞文， ⑥. 非 être 属詞動詞文，⑦ être 文，⑧ 非人称文，⑨ 主辞なし動詞文，⑩ 非動詞文。

(2) 直接目的の属詞を組織する動詞の分析。

(3) 属詞動詞分析。

(4) 非動詞文分析。

(5) 構文間について。直接目的と属詞の両立が見られる構文（On laisse Luc tranquille）の中には属詞動詞構文（Luc est tranquille）が含まれているとする前提があるが，これらの関係を明らかにする。

(6) 直接目的属詞文（Luc trouve bon ce café），属詞動詞文（Ce café est bon），非動詞文（Bon, ce café）の三構文の関係も検証する。三構文の事例分析，三構文間の範列的関連の調査（頻度分析を含む）。全構文体系中での他動性と属詞性の本質的つながり，動詞文と非動詞文との関係が明らかになれば本調査の目的は達成されたことになる。

３．研究の方法

本研究は直接目的属詞構文（N_0-V-N_1-Adj_2.），属詞動詞構文（N_1-V-Adj_2.），非動詞文（Adj_2,-N_1.）の事例の分析，頻度調査により構文構成要素の範列的比較を行い相互の関連の解明をする。個別の直接目的属詞動詞の分析は 1,000 例くらいを分析し，種々の構文の相対頻度を明らかにして，構文毎の範列一覧を作成する。同様の分析を属詞動詞についても実施する。非動詞文分析では，直接目的属詞文と属詞文との範列的比較とも関係させ，特に文脈分析に配慮する（非動詞文出現条件）。

(1) 直接目的属詞を取る幾つかの重要動詞を選び，その構文分析を行う。当該動詞は代表的で頻度の高いものだけでも, avoir, appeler, choisir, connaître, croire, déclarer, estimer, faire, juger, laisser, nommer, proclamer, rendre, trouver, 等，がある。例えば，laisser には通常の能動直接目的属詞構文（Luc laisse Marie tranquille）があり，受動のもの（Marie est laissée tranquille）や代名動詞のもの（Marie se laisse tranquille）もある。しかし，属詞の範列に入りうる要素は形容詞や名詞だけではない。副詞（Luc laisse Marie debout），前置詞句（Luc laisse Marie sans travail），不定詞（Luc Laisse Marie chanter），等も考慮しなければならない。これらは全て直接目的の Marie が置かれている，あるいは，そうなる「状態」を示している。この観点からすると laisser の全ての構文が繋がりをもち一つの体系を構成する。

(2) 属詞動詞。apparaître, être, demeurer, devenir, paraître, rester, sembler, passer, 等。例えば，être では，Luc est content – Luc l’est, Luc est à Paris – Luc y est の対応関係に見られるように，属詞動詞と存在動詞の二種が区別出来る。しかし，通常，être の後の位格は省略し難いので，この位格は属詞の一種とみなされる。この種の問題も実例の頻度数確認により一定程度明らかになる。別の例として，rester の構文では位格的なものと属詞的なものが種々の構文を通してつながっている。Luc reste à Paris, Luc reste à Léa, Luc reste à la mode, Luc reste content, Luc reste à bavarder, Luc reste dîner, Ce colis reste à partir, Il reste ce colis à partir, Reste à partir ce colis, Reste à partir, 等。「主辞なし動詞文」（最終例）も出現する。

(3) 非動詞文構文分析では外心構造が重要な役割を担っている。これは，内心構造が典型的に動詞文の一部分を成す構造だからである。典型的な内心構造である名詞句に限らず，形容詞句でも副詞句でも他を修飾するものは必然的に一つにまとまる。動詞文は典型的に外心構造（中心の「主辞 – 述辞」が外心）であり，前後のどの要素にも従属していない。また，Luc laisse tranquille ce garçon で tranquille ce garçon は文の一部ではあるが，一つにはまとまらず外心構造である。これに対して un garçon tanquille は内心構造である。同様にして，非動詞文 Très bien, ce travail-là では外心構造がこの文の独立を保証する。これらの分析において動詞省略による不完全な動詞文であるとするのは適切ではない。文脈中で統辞的に完全に独立していることを見逃してはならない。定形動詞なしの独立文（頻度はかなり高い）の可能性を見て取るべきである。Et Luc de partir のような「説話体

不定詞」とされる発話もやはり外心構造が基本にある。内心の la décision de partir に対して Luc de partir は名詞句にはまとまらない。非動詞文の特殊性を尊重しながらも，特に動詞文属詞構文とのつながりの解明が重要になる。先ず，être 属詞文との関連である。動詞文では「属詞」は何かの「状態」を表している。非動詞文においてもこの種の意味関係は存在しうるが，むしろ，「主辞 – 定形動詞述辞」の枠から解き放たれて一つの「事態」のみが文の中心になる可能性がある。

４．研究成果

(1) 直接目的属詞構文

① juger の構文。高頻度のものとしては，「N-V-N」(1,251 例中 100 例),「N-V-*que*V」(108 例), 「N-V-N-[A/Vé]」(258 例)，「N-*être*Vé-[A/Vé]」(155 例)（N: 名詞，V: 動詞，A: 形容詞，Vé: 過去分詞）が目立っている。つまり，直接目的一項のものと「N-[A/Vé]」の二項のものである。また，「N-V-*de*Vinf-A」(84 例) がある。「N-V-*que*V-A」(10 例) も注目すべきである。この構文の低頻度は構文の複雑さからして当然であるが，先行研究では注目されていないこと，そして，「N-V-N-A」を que つきの être 文から派生することの可否という観点からしても注目に値する。

次に高頻度のものとして，「N-V-*de*N」(77 例),「N-V-*de*N-*par*N」(78 例) がある。これは juger が，直接目的と対比すべき de つきの間接目的をも組織するという点で重要である。間接目的 *de*N で「対象」が提示されると，その属性を述べる項が後続する「間接目的属詞構文」がありえて「N-V-*de*N-*comme*A」(1 例) として出てきた点は重要である。更に N-V-*à propos de*Vinf」(1 例) も注目すべきである。

頻度は低いが，次の三構文は「N_0-V-N_1-A_2」との関連で重要である。「N_0-V-N_1-N_2」(5 例),「N_0-V-N_1-$Vinf_2$」(4 例),「N_0-V-$Vinf_1$」(3 例)。

便宜上，伝統的に「直接目的属詞」とされる用語で論を進めているが，直接目的属詞も，être との関連によるよりも構文型によりまとめて行くのが我々の展望である。そうすると，「N_0-V-N_1-N_2」と「N_0-V-N_1-$Vinf_2$」は一つに，「N_0-V-N_1-A_2」，「N_0-V-*de*$Vinf_1$-A_2」，「N_0-V-*que*V_1-A_2」も一つにまとまる。ただし，「N_0-V-N_1-*sans*N_2」のような構文（前置詞つきの間接項を持つ）は別になる。しかし，間接項を組織する構文を一まとめにすると，「N_0-V-*de*N_1-*comme*N_2」（動詞の右に間接項を 2 つ）のような構文も考察対象に入ってくる。

また，juger の意味（「判断する」）と関係して，判断の「対象」たる直接・間接目的（N, *de*N）だけではなく，判断の「根拠・基準」を表す間接項たる前置詞句も目立っている。

② 位格構文

位格構文は方向性を持って述辞と密接につながり特有機能になると属詞との範列的関係が強くなる (On est loin – On est proche, On laisse Luc là – On laisse Luc tranquille)。

一般的に位格は全動詞の周りに出現する状況項の一つで非特有機能であるが，方向性位格 (Luc va à Paris, Luc envoie ce livre à Paris) は受け入れる動詞も制限されて来る。方向性位格はやはり方向性を持ち特有機能である与格 (Luc donne ce livre à Marie) とも共通性を持つ。

Luc répond à Marie – Luc lui répond では与格で，Luc répond à sa lettre – Luc y répond では方向性位格とされる。これは統辞関係構成を無視した「人間 – 非人間」の違いではない。Ces gens-là, j'y pense – *Je leur pense のように「人間」が y になることは可能だし，On dit adieu au départ – On lui dit adieu – *On y dit adieu のように「非人間」が lui になることも多い。動詞により構文は決められているが (*y penser – *lui penser, *y dire adieu – lui dire adieu, y répondre – lui répondre*), 問題は方向性の y と lui の間の違いは何かである。それは y の場合は「一方的」で lui の場合は「双方的」である。これは y, lui が可能，不可能な両方の場合に有効である。y は単なる方向づけか到達点，lui は「発送人・話し手」たる主辞に対する「受取手・話し相手」であり，これは「人間－非人間」とは無関係にである。résister は y, lui の両方を取るが On [lui/*y] résiste, à la tentation, On [*lui/y] résiste, à reprendre un verre となる。tentation が裏側に受取手（人間とは限らない）を考えさせ，名詞ならざる不定詞 reprendre が受取手にはなりえないのは明白である。penser à は対象を一方的に考えることであり，y répondre – lui répondre の一方的，双方的も理解しやすい。

コーパスでは，y, lui の両方を受け入れる obéir の場合 700 弱例中で一方的なものは極めて少ない。実際に y が出現したのは 1 例のみである。また，y のみを認める renoncer の場合，不定詞または動作名詞が 500 例中 43%, y の出現は 6.6%で，双方向を期待させる（しかし，不可）人間・生物は 3.2%である。属詞との範列関係は「一方的」の方が近いと言える (*On le* [*lui/y*] *laisse – On le laisse tranquille – On le laisse chanter*)。

(2) 属詞動詞文

① sembler の構文。属詞とは「繋辞動詞（être,

等）を介して人称主辞を修飾，形容する名詞や形容詞」，というように狭く考えられる傾向がある。この傾向は，動詞が être の場合は目立たない。つまり，être の意味は弱く，後続する不可欠要素は属詞ということになる。Vouloir, c'est pouvoir で pouvoir は属詞であることに問題はない。しかし，他の動詞の場合には，上の傾向が強くなり，不定詞や que 節が属詞であるとは容易には認められない。

文構成要素の選択枠となる統辞的範列は統辞機能により構成されているのであって，一見機能から独立しているように見える品詞によってではない。どのような品詞でも統辞機能を担わなければ文構成要素にはなりえない。

Luc semble content で content が属詞なら，Luc semble chanter でも chanter は属詞以外の機能を担い得ない。両要素の範列は同じなのである。Luc semble chanter と Il semble que Luc chante とを比較して，後者から前者を引き出そうとして前者の semble に助動詞的働きを認めることがあっても良い。Luc semble chanter において semble が助動詞的であるとすることと chanter が属詞であることとの間には矛盾はない。しかし，問題は後者で que Luc chante の統辞機能が不明では困る。上記二文において属詞は chanter と que Luc chante なのであり，文の意味的中心も正にそこにある。semble は属詞動詞であり，違いは，前者では主辞 Luc が存在し，後者では主辞は存在せず空の Il があるのみ，ということである。Il semble que Luc chante と Il semble vrai que Luc chante とを比較すると上記のことは更に明白になる。つまり，後者では vrai が属詞であり，que Luc chante は意味的主辞になる。そうすると，sembler が同一であり，前者には vrai がないので, 前者の que Luc chante は後者と同じ意味上の主辞にはなりえない。よって, 前者における vrai の省略を認めないならば（この提案はない），que Luc chante は属詞機能以外の何ものでもないことになる。以上の分析は *Le Monde* 1994（以下 *LM*）, *Frantext* 1993-97（以下 *FT*）の 994 例の実例調査に基づく。

② paraître の構文。動詞 paraître は主辞のみの自動詞構文（paraître$_1$）と主辞と属詞の属詞構文（paraître$_2$）とを持つ。これらの元になっている構文的意味（「現れる」と「～に見える」）は明白であるが，実現された形は類似している場合がある。

これに対して，動詞 sembler は自動詞用法を持たず属詞構文しか持たない。属詞構文において sembler と paraître とは類似している場合が多い。②-1. Ce ton paraît$_2$ une provocation – Ce ton semble une provocation，②-2. Luc paraît$_2$ content – Luc semble content，②-3. Luc paraît$_2$ danser – Luc semble danser，②-4. Il paraît$_2$ que Luc danse – Il semble que Luc danse，②-5. Il me paraît$_2$ que Luc danse – Il me semble que Luc danse，②-6. Il paraît$_2$ étrange que Luc danse – Il semble étrange que Luc danse. 構文的には ②-1. から ②-6. の対全てが基本的に同じということになる。

sembler にはない paraître の自動詞用法としては，②-7. Il paraît$_1$ une annonce au journal (Une annonce paraît$_1$ au journal)，②-8. Il paraît$_1$ au journal que l'euro monte ($^{??}$Que l'euro monte paraît$_1$ au journal) がある。②-7.，②-8. は sembler には不可能である。

構文頻度は以下のとおりである。（Att :属詞, fr :前置詞句）

N-V	(*LM*: 266,	*FT*: 34)
N-V-Att	(*LM*: 500,	*FT*: 163)
N-V-Att-fr	(*LM*: 110,	*FT*: 212)
Il-V-N	(*LM*: 15,	*FT*: 29
Il-V-Att	(*LM*: 46,	*FT*: 66)
Il-V-Att-N	(*LM*: 23,	*FT*: 7)
Il-V-Att-fr	(*LM*: 2,	*FT*: 5)
Il-V-Att-N-fr	(*LM*: 29,	*FT*: 9)
[*Cela*/*Ça*]V-Att-N	(*LM*: 0,	*FT*: 2)
[*Cela*/*Ça*]-V-Att-N-fr	(*LM*: 1,	*FT*: 3）
V-Att	(*LM*: 1,	*FT*: 0）

計 1,496；*LM*: 993, *FT*: 503

1,496 例中，自動詞（N-V と *Il*-V-N）317 例（21.2 %）に対して属詞動詞 1,179 例（78.8 %）である。しかし，この自動詞用法は殆どが人称構文の例である。非人称は 17 例のみで，しかも，成句化した il y paraît の 14 例を含めてのことである。我々のコーパス中に上の ②-8. Il paraît$_1$ au journal que l'euro monte のような例は見られない。paraître の自動詞用法の人称構文において主辞が *que*V になることは殆ど不可能であるが，非人称構文においてすら *que*V は実主辞的な機能を担うことは殆どない。実際に出現した自動詞の非人称構文は上の (7) Il paraît$_1$ une annonce au journal のように実主辞が名詞・名詞句の例であり，この場合，当然，人称構文も可能である。この非人称構文ですらわずか 2 例である。つまり，非人称構文で paraître と sembler の差異は殆ど認められない。

③ être の構文。être の用法は大きく分けて存在文と後続の 1 要素が不可欠な文とに分けることが出来る。先ず，存在文である être の自

動詞絶対用法が資料体の 2,122 例中 2 例のみであり，しかも，従属節中においてであって独立文としてではなかった。

次に，構文分類についてであるが，être が関係しうるのは，文型の観点からは，大きく分けて，人称自動詞絶対構文（X-*être*），人称属詞または位格構文（X-*être*-Y-），非人称属詞または位格構文（[*Il*/*Ce*]-*être*-Y-）の 4 種ということになる。非人称には ce も考慮すべきである。いわゆる強調構文（*Ce*-*être*-[N/Ad/fr]-[*qui*/*que*]V）においては être とその後続必須要素との関係は一定で，後者は属詞機能と見なすべきであろう。

Luc est gai – Luc l'est, Luc est à Paris – Luc y est に見られる代名詞 le と y の違いは二種の être があることを示している。前者が属詞を現働化する繋辞であり，後者は位格要素を従える être 本動詞とでも言うべきものである。しかし，この後者にしても Dieu est のような自動詞絶対構文の être とは区別しなければならない。何故なら，être は位格要素を従えるとは言いながら，この位格要素は不可欠だからである。つまり，自動詞絶対用法の être，位格を従える être，属詞構文の être の 3 種を認めねばならない。しかし，自動詞絶対用法は実際上は無視できる程であり，更に，特に前置詞句に関しては，具体的位格，抽象的位格，属詞の間には多くの段階があって明瞭に境界を設定しうるとは限らないことにも注目すべきである。

(3) 非人称構文と属詞

① 非人称構文中の属詞。人称構文で自動詞の左に位置する主辞は非人称構文で右へ移動する (Un accident arrive→Il arrive un accident)。この移動は右位置が既に占められている他動詞では難しい。属詞動詞も一見主辞と属詞の二項を組織している (Luc est [content])。([ ]は属詞。）しかし，(De) chanter est [intéressant]→Il est [intéressant] de chanter に見られるように，実際は一項構文である。属詞は種々の形が担う：名詞 (Luc est [avocat]), 不定詞 (Vouloir, c'est [pouvoir]), 形容詞 (Luc est [gai]), 副詞 (C'est [loin]), 種々の句・節 (Luc est [d'esprit simple], Cela est [à la mode], Le fait est [qu'il t'aime])。

人称構文では属詞は主辞機能を前提とするが，非人称構文で属詞と共に出現する主辞は il であり意味的には空で，文もその意味も成立するのが原則である (Il est [tard], Il est [temps], Il semble [que Luc chante])。「主部 – 述部」の人称構文は二要素構成であり「il – 述部」の非人称構文は本質的に一要素構成である。述部である属詞は不可欠であるが，統辞的でも意味的でも人称主辞相当が不可欠ではないのはフランス語の構文的事実である。

② 直接目的と属詞。フランス語の属詞と直接目的は本質的に異なるが，形はかなり類似しているところがある。直接目的を取る他動詞は典型的には左側に主辞を右側に直接目的を取り，最高頻度の文型をなす。これに対して，一項自動詞は左に主辞を構成するのみである。更に，être を代表とする属詞自動詞は左に主辞を右に属詞を構成して二項構成のように見えるが，統辞機能上は属詞の方がむしろ中心をなし動詞はそれを現働化するとされ，述辞としての中心性は一項自動詞よりも弱い。

動詞の右の直接目的は名詞句相当の要素が担い，やはり右に来る属詞は名詞句以外の諸要素も担うが典型は形容詞である。これらの統辞機能の認定は人称構文では問題はないが，非人称構文ではそうとは限らない。特に，人称構文の主辞が長くなったりして動詞の右側に移り，所謂「実主辞」と言われるものになったり（Il semble curieux que Luc chante），一つの動詞形が一項自動詞と属詞自動詞の意味を持ち合わせたり（例．paraître）すると，「主辞 – 述辞」の二要素構成を不可欠なものとする観点からは文の構成要素の機能認定が揺らいで来る。

「*il* – 述辞」においては真の主辞は存在しない。しかし，述辞が消えることは定義上ありえない。以上から，非人称構文において述辞の右位置の名詞句の機能は 「主辞相当」か「直接目的」か「属詞」かということになる。Il semble curieux que Luc chante においては curieux が優先的に属詞と認定される（形容詞は主辞相当にも直接目的にもなりえない）。これに後続の que Luc chante が主辞相当になる。Il semble que Luc chante においては que Luc chante は主辞相当にはなりえない。このような人称主辞をもつような対応構文が存在しないし, sembler は属詞を必要とするからである。人称構文において直接目的ではありえない属詞形容詞を構成する動詞である sembler の項として直接目的を想定しうる根拠はない。主辞相当句なしでは属詞を構想しえないのは偏った構文モデルである。

(3) 非動詞文

フランス語では述辞核は主として動詞クラスの記号素が担うが，定形動詞を含まない文も存在する。

文の体系とは文型体系のことである。一定数の限られた型が文構成の基にあり，これに

従って個別の文は作られる。フランス語では動詞文の型が体系を圧倒している。この動詞文型の体系には大きく分けて，他動詞構文を始めとして，9 種の構文下位クラスがある。これらの構文の中心核の部分には何らかの形で定動詞が含まれていて，9 種の特徴づけには，主辞，直接目的，間接目的，属詞，非人称主辞，連辞的中心核の諸統辞機能，代名動詞構文，受動態，等が関わっている。これに非動詞文の型が加わって 10 種になる。

動詞文と非動詞文の二つに大きく分かれるが，先ず，文を構成する意味単位である記号素は共通である。次に記号素が属するクラスである品詞，その下位クラスは共通でクラスの基にある結合可能性も共通である。それから，特に注目すべきは，意味単位の結合グループの中の一つの中心に収斂する内心性，一つには収斂しない外心性も共通である。

異なっているのは型の構成原理である。つまり，動詞文を特徴付ける諸概念は非動詞文においては使用できない。例えば，非動詞文 Chauds, les marrons ! の型を特徴付けるにあたって，主辞や属詞といった概念は使用出来ない。これまでの非動詞文研究においても Chauds が属詞，les marrons が主辞とする分析に近いものがある。このような分析では非動詞文を動詞文の不完全なものとすることになる。

我々の分析では Chauds は述辞（この機能は文の中心という意味であらゆる文に不可欠な一般統辞論的概念である）であり，les marrons はこの構文型を特徴づけるのに不可欠な外心的拡張になる。この拡張は主辞ではありえない。Chauds を述辞とするのは，形容詞の結合可能性として「他要素（特に名詞）を積極的に限定する」ということと「コピュラ（être，等）に助けられて属詞として働く」があるからである。これに対して，名詞（les marrons）は「積極的な結合可能性」は持っていない。

非動詞文の分析では要素配列順にも関係する外心性に特に注目すべきである。上例を少し変えた Les marrons chauds ! でも独立文になりうるが, Les marrons, chauds ! では独立性も上がる。Chauds, les marrons ! になると内心性は消え外心構造となり，動詞文の一部である名詞句ではないことが明示される。内心性とは「一部分」を代表し，外心性とは正に「一部分ではない」ことを表す形式的特徴である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 敦賀陽一郎「フランス語構文型体系における無動詞文の位置づけ：非動詞文分析序説」,『東京外国語大学論集』，査読無，85 号, 2012, pp. 333-368.

② 敦賀陽一郎 「フランス語における être の属詞，位格，非人称構文」,『東京外国語大学論集』，査読無，84 号, 2012, pp. 263-311.

③ 敦賀陽一郎 「フランス語の属詞動詞と自動詞：paraître の事例」,『東京外国語大学論集』，査読無，83 号, 2011, pp. 229-275.

④ 敦賀陽一郎「フランス語における動詞 sembler の属詞構文」,『東京外国語大学論集』，査読無，82 号, 2011, pp. 299-330.

⑤ TSURUGA Yoichiro “ Le locatif, le locatif directionnel unilatéral et le datif en français ”, *Les Tables, La Grammaire du français par le menu, Mélanges en hommage à Christian Leclère*, éd. par T. Nakamura, E. Laporte, A. Dister, C. Fairon, *Cahier du Cental*, 査読無, 6, Presses Univ. de Louvain, 2010, pp. 363-372.

⑥ 敦賀陽一郎 「フランス語の直接目的属詞構文：動詞 juger の事例」,『東京外国語大学論集』，査読無，81 号，2010 年，pp. 339-382.

〔学会発表〕（計 1 件）

① TSURUGA Yoichiro “ L’attribut dans les constructions impersonnelles ”, *Actes du 31 e Colloque International sur le Lexique et la Grammaire*, éd. par J. Radimský, Univ. de Bohême du Sud, České Budějovice, 2012, pp. 151-154.

〔図書〕（計 1 件）

① （共著）グループ «セメイン »『フランス語を見わたす — フランス語学の諸問題 IV』, 敦賀陽一郎「フランス語における属詞と直接目的」，pp. 62-75 担当，三修社，2013.

６．研究組織

(1) 研究代表者

敦賀　陽一郎（TSURUGA　YOICHIRO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：30155444